

7-4

シニアの社会参加に関する調査 ～高齢者の生きがいと社会参加・学習活動～

滋賀大学 社会連携研究センター 教授 神部 純一

1. はじめに

少子高齢化の時代を迎え、滋賀県においても人口減少が始まっている。そうした中、誰もが豊かに生きることができる社会づくりのためには、医療、介護等のサービスの充実とともに、元気な高齢者が、地域の中で生き生きと生活し続けられる環境づくりが進められなくてはならない。

滋賀大学社会連携研究センターは、今年度、高齢者が豊かな経験や知識・技術を生かしながら活躍できる社会づくりを目指して、高齢者の社会参加や就労の実態とニーズを把握するために、「シニアの社会参加に関する調査」（滋賀県社会福祉協議会、草津市、米原市との共同研究）を実施した。

本稿では、その調査結果の中から、高齢者の「生きがい感」に焦点をあて、それが社会参加活動・学習活動とどう関係しているのかについて分析・考察する。

2. 調査の方法

- (1) 調査対象 : 草津市・米原市の 65 歳以上の市民
- (2) 標本数 : 2,500 名 (草津市 1,500 名 米原市 1,000 名)
- (3) 抽出方法 : 住民基本台帳を用いた無作為抽出
- (4) 調査方法 : 質問紙による郵送調査
- (5) 調査期間 : 平成 29 年 10 月 6 日～10 月 31 日 (草津市)
平成 29 年 10 月 10 日～10 月 31 日 (米原市)
- (6) 回収結果 : 1,353 名 (回収率 54.1%)

3. 調査の結果

- (1) 社会参加活動と生きがい感

1) 社会参加活動の実態

図 1 は、社会参加活動の実態をみたものである。

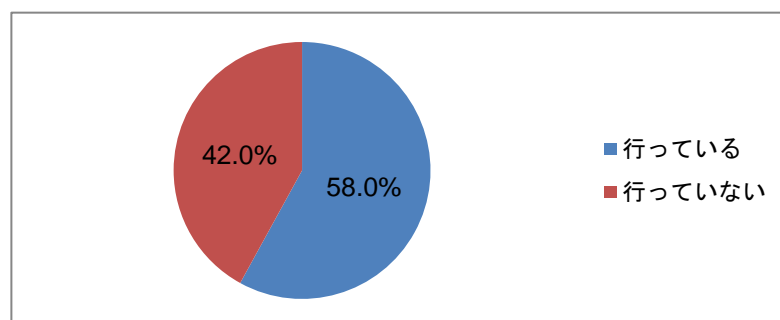


図 1 社会参加活動への参加の実態 (N=1,332)

その結果、58.0%の人が、社会参加活動を「行っている」と回答していた。

では、社会参加活動への参加経験は、生きがい感とどう関係しているのでしょうか。図2は、社会参加活動への参加経験と生きがい感についてみたものである。

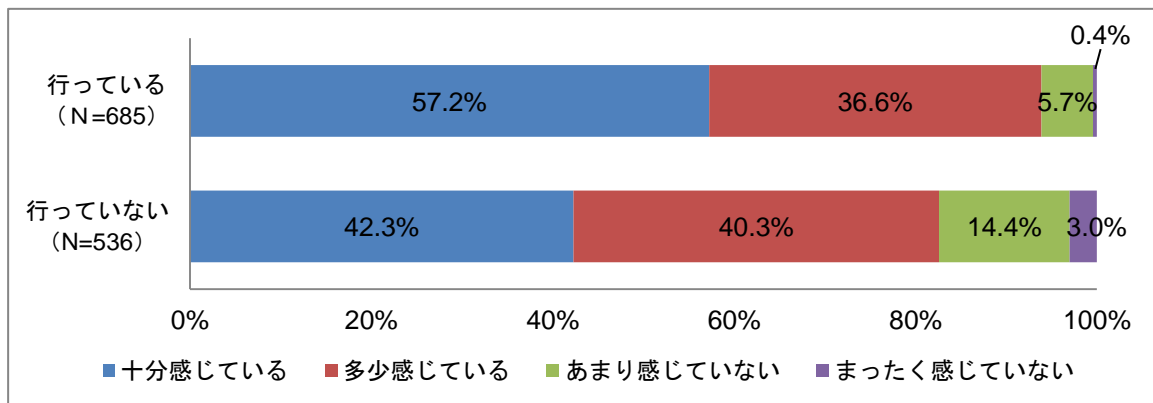


図2 社会参加活動の有無と生きがい感

その結果、社会参加活動を「行っている」人では、57.2%が生きがいを「十分感じている」と回答していたのに対して、「行っていない」人で「十分感じている」と回答した人の率は、42.3%に留まっていた。

2) 社会参加活動の内容

図3は、社会参加活動の内容をみたものである。

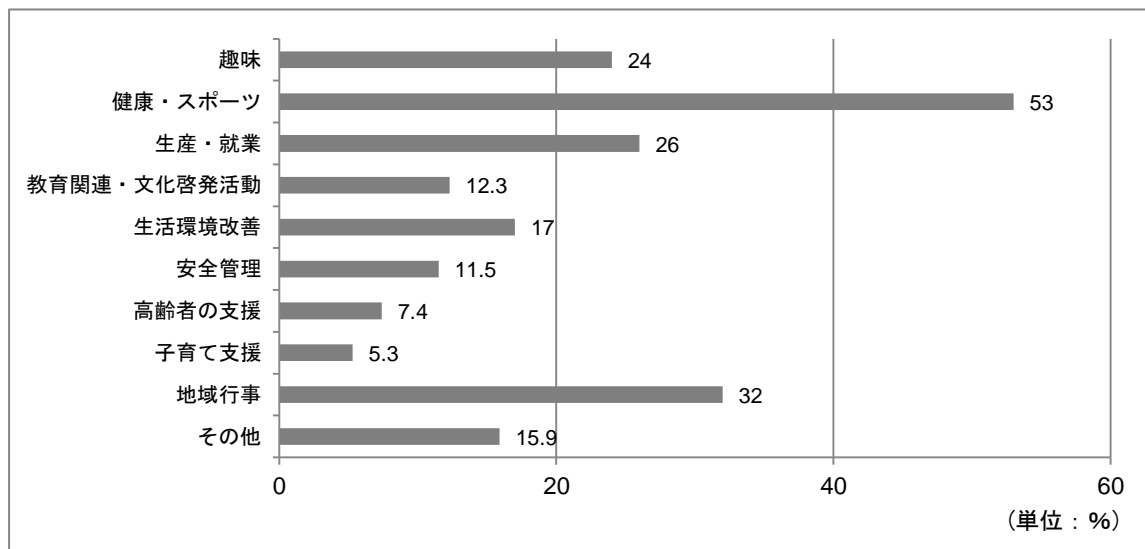


図3 社会参加活動の内容(複数回答)

その結果、「健康・スポーツ（体操、歩こう会、ゲートボール等）」を行っている人の率が53.0%でもっとも高く、次いで「地域行事（祭りなどの地域の催しものの世話等）（32.0%）」、「生産・就業（生きがいのための園芸・農業、シルバー人材センター等）（26.0%）」の順となっていた。

図4は、活動内容を、生きがいを「十分感じている」人と、「感じていない（「あまり感じていない」＋「まったく感じていない）」人のグループに分けてみたものである。

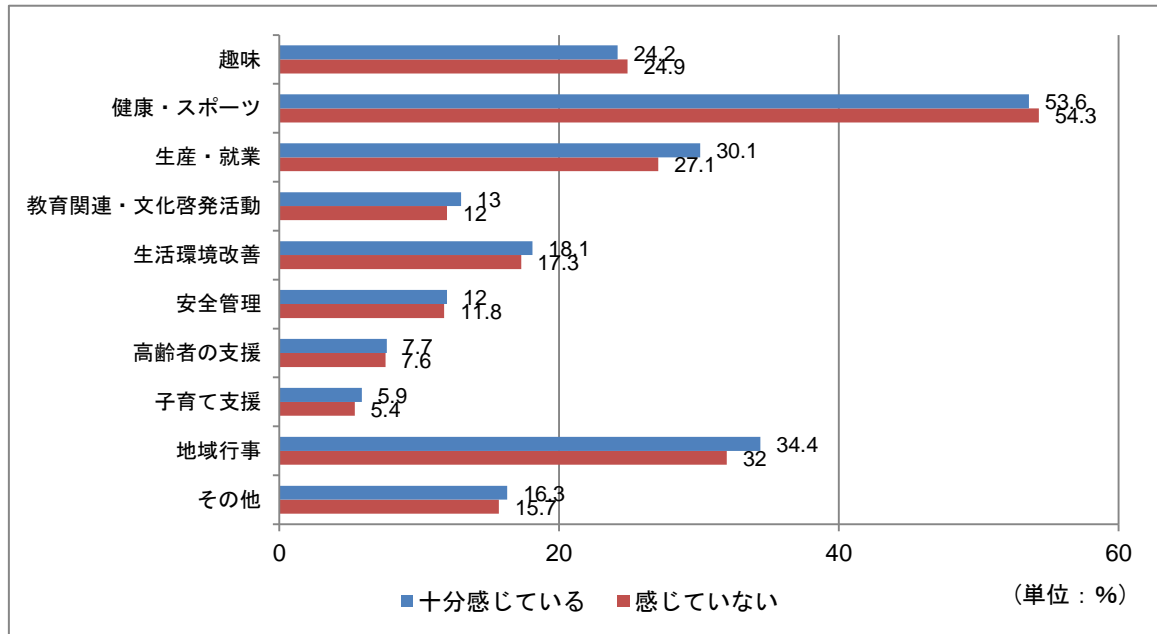


図4 活動内容と生きがい感(複数回答)

その結果、両者とも、「健康・スポーツ（体操、歩こう会、ゲートボール等）」を行っている人の率ももっとも高く、次いで「地域行事（祭りなどの地域の催しものの世話等）」、「生産・就業（生きがいのための園芸・農業、シルバー人材センター等）」の順となっていた。両者の間に明確な差は認められなかった。

3) もっとも力を入れている活動と生きがい

図5は、行っている活動のうち、もっとも力を入れている活動をみたものである。

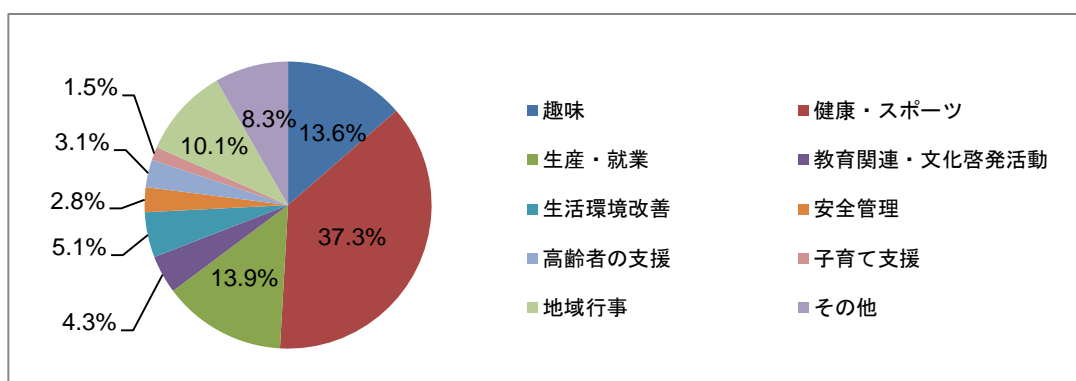


図5 もっとも力を入れている活動(N=671)

その結果、「健康・スポーツ（体操、歩こう会、ゲートボール等）」と回答した人の率が37.3%でもっとも高く、次いで「生産・就業（生きがいのための園芸・農業、シルバー人材センター等）」（13.9%）、「趣味（俳句、詩吟、陶芸等）」（13.6%）」の順となっていた。

図6は、もっとも力を入れている活動と生きがい感との関係をみたものである（「子育て支援」については、標本数が10未満であったため、分析対象から除外している）。

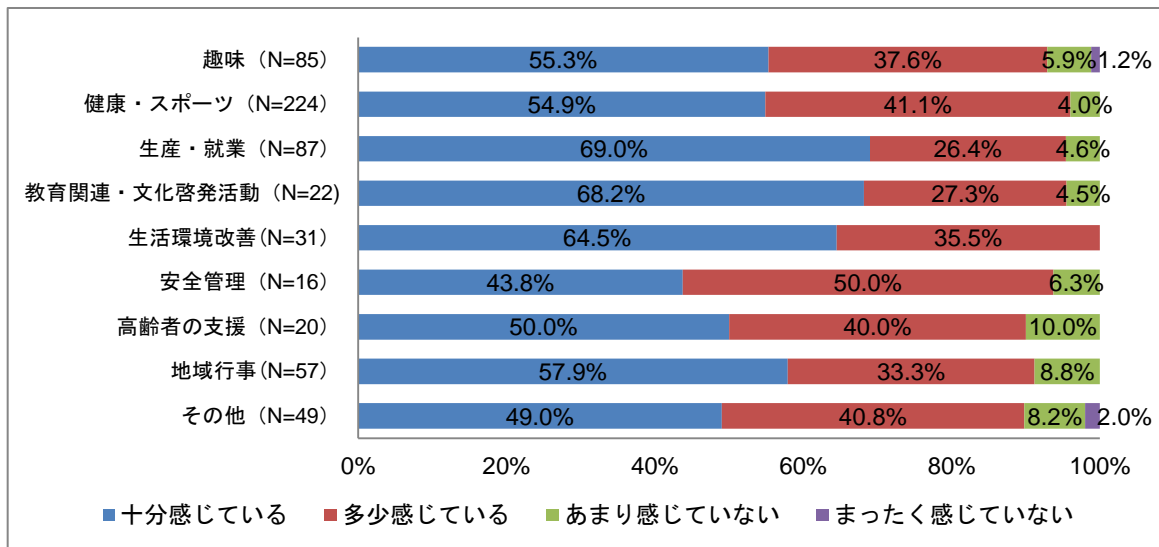


図6 もっとも力を入れている活動と生きがい感

その結果、生きがいを「十分感じている」人の率もっとも高かったのは「生産・就業（生きがいのための園芸・農業、シルバー人材センター等）」であり、次いで「教育関連・文化啓発活動（学習会、子供会の育成、郷土芸能の伝承等）」、「生活環境改善（環境美化、緑化推進、まちづくり等）」の順となっていた。

図7は、もっとも力を入れている活動に参加した理由をみたものである。

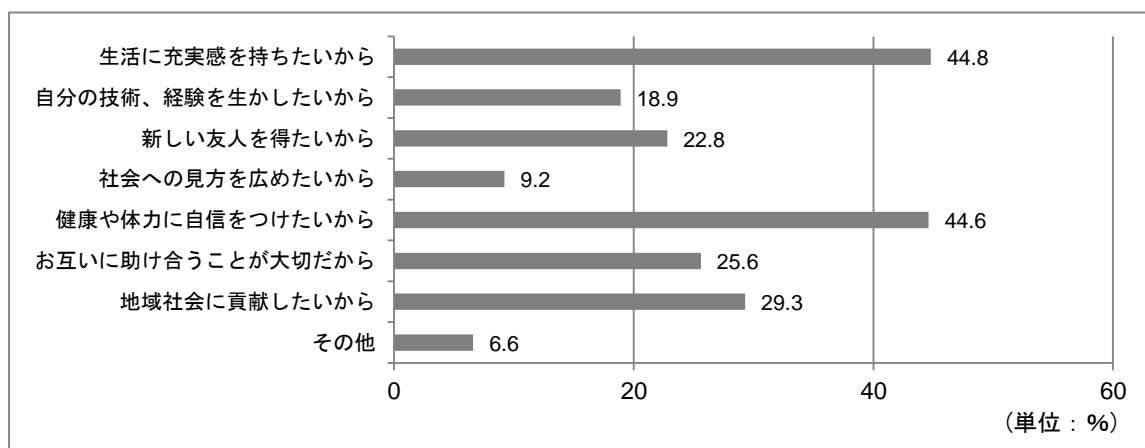


図7 もっとも力を入れている活動に参加した理由（複数回答）

その結果、「生活に充実感をもちたいから」と回答した人の率が44.8%でもっとも高く、次いで「健康や体力に自信をつけたいから（44.6%）」、「地域社会に貢献したいから（29.3%）」の順となっていた。

図8は、もっとも力を入れている活動に参加した理由を、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみたものである。

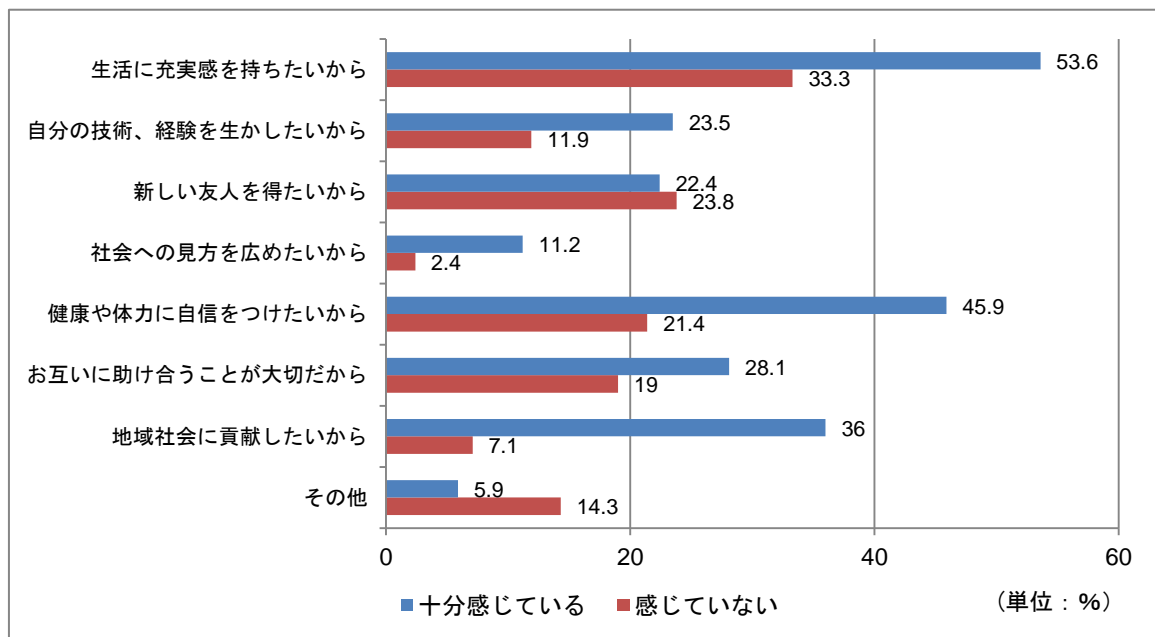


図8 もっとも力を入れている活動への参加理由と生きがい感(複数回答)

その結果、両者とも「生活に充実感を持ちたいから」と回答した人の率が高いことは共通していたが、次いで生きがいを「十分感じている」人では、「健康や体力に自信をつけたいから」、「地域社会に貢献したいから」の順、「感じていない」人では「新しい友人を得たいから」、「健康や体力に自信をつけたいから」の順となっていた。

両者を比較すると、「生活に充実感を持ちたいから」、「健康や体力に自信をつけたいから」、「地域社会に貢献したいから」で20ポイント以上の開きがあり、生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。

図9は、もっとも力を入れている活動への参加頻度をみたものである。

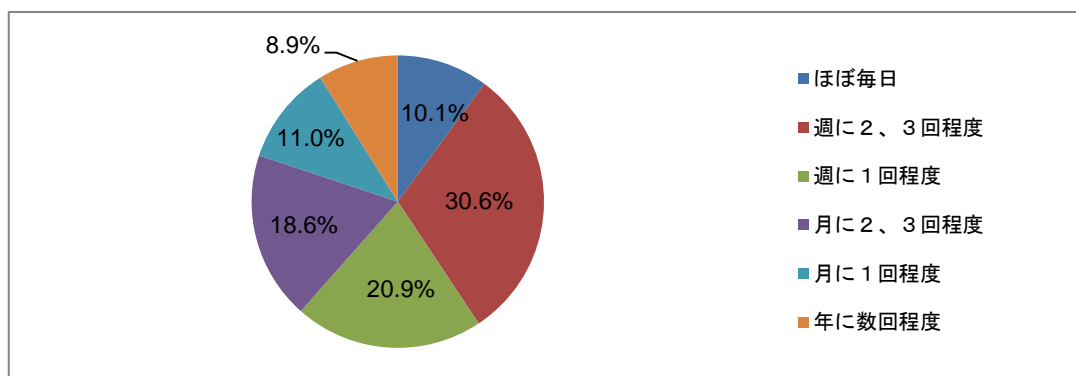


図9 もっとも力を入れている活動への参加頻度(N=743)

その結果、「週に2、3回程度」と回答した人の率が30.6%でもっとも高く、次いで「週に1回程度(20.9%)」、「月に2、3回程度(18.6%)」の順となっていた。

図 10 は、もっとも力を入れている活動への参加頻度と生きがい感との関係を見たものである。

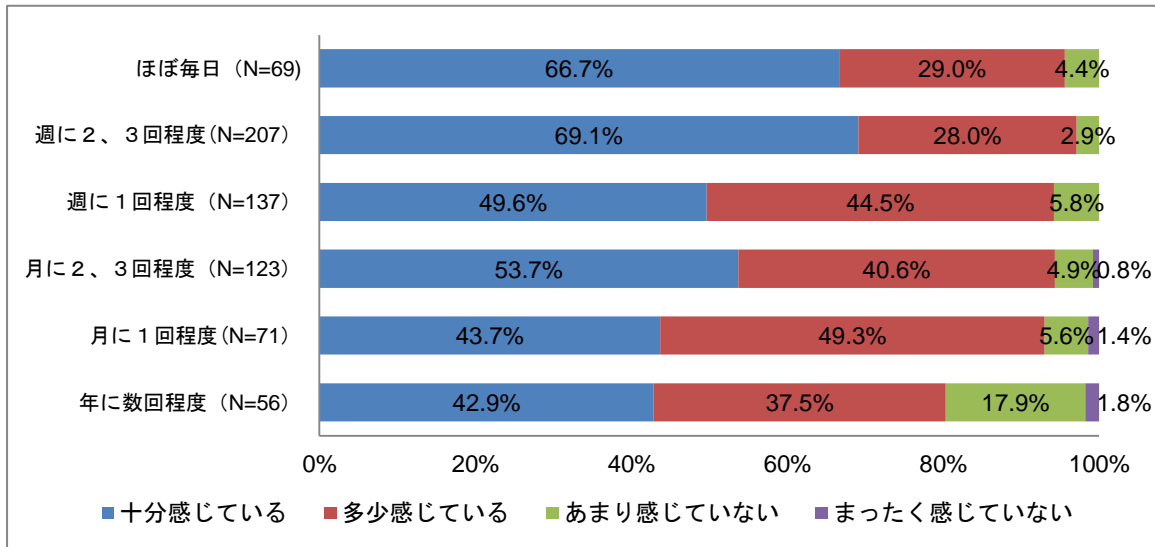


図 10 もっとも力を入れている活動への参加頻度と生きがい感

その結果、生きがいを「十分感じている」人の率は、「週に2、3回程度」以上の人で高く、「月に1回程度」以下の人で低いことが明らかになった。

図 11 は、もっとも力を入れている活動に参加して良かったことをみたものである。

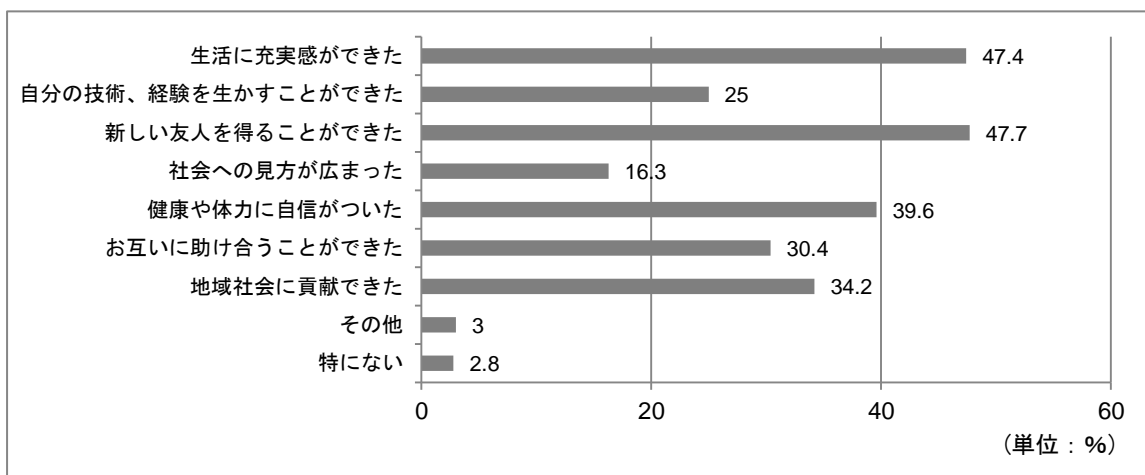


図 11 もっとも力を入れている活動に参加して良かったこと(複数回答)

その結果、「新しい友人を得ることができた」と回答した人の率が47.7%でもっとも高く、次いで「生活に充実感ができた (47.4%)」、「健康や体力に自信がついた (39.6%)」の順となっていた。

図 12 は、もっとも力を入れている活動に参加して良かったことを、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみたものである。

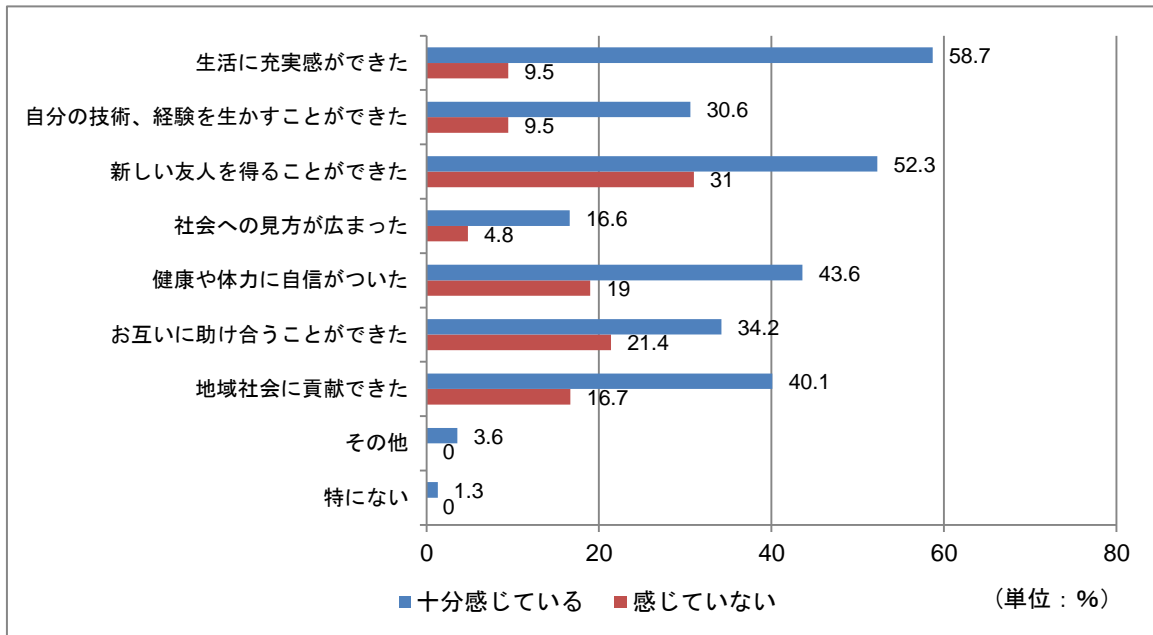


図 12 もっとも力を入れている活動へ参加して良かったことと生きがい感(複数回答)

その結果、生きがいを「十分感じている」人では、「生活に充実感ができた」と回答した人の率も最も高く、次いで「新しい友人を得ることができた」、「健康や体力に自信がついた」の順となっていた。一方、生きがいを「感じていない」人では、「新しい友人を得ることができた」と回答した人の率も最も高く、次いで「お互いに助け合うことができた」、「健康や体力に自信がついた」の順となっていた。

両者を比較すると、「生活に充実感ができた」、「自分の技術、経験を生かすことができた」、「新しい友人を得ることができた」、「健康や体力に自信がついた」、「地域社会に貢献できた」で 20 ポイント以上の開きがあり、生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。

4) 就労経験と生きがい感

図 13 は、現在の就労経験をみたものである。

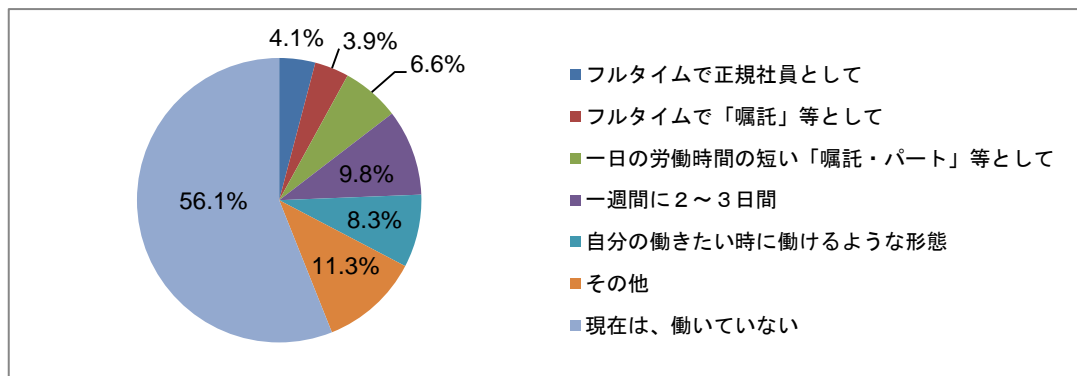


図 13 現在の就労経験(N=1,206)

その結果、43.9%の人が現在就労していた。就労の形態としては、「その他」と回答した人の率が11.3%で最も高く、次いで「1週間に2～3日間（9.8%）」となっていた。

「その他」には、「自営業」、「必要とされる時間だけ」といった回答が含まれていた。

図14は、就労経験と生きがい感との関係をみたものである。

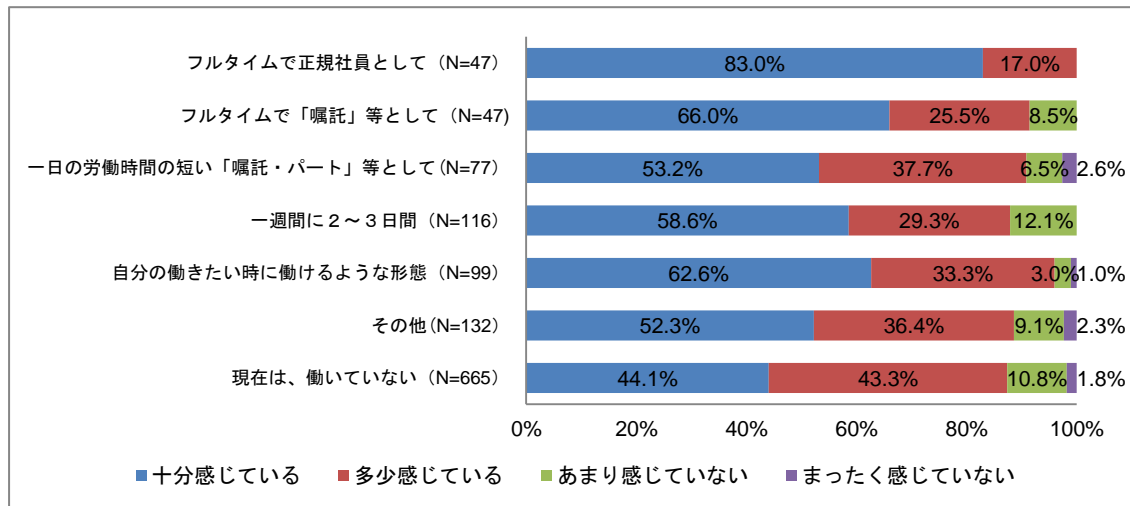


図14 就労経験と生きがい感

その結果、生きがいを「十分感じている」人の率ももっとも高かったのは、「フルタイムで正規社員として」働いている人であり、次いで「フルタイムで「嘱託」等として」働いている人、「自分の働きたい時に働けるような形態」で働いている人の順となっていた。一方、「現在は、働いていない」人の率が、もっとも低くなっていた。

(2) 学習活動と生きがい感

1) 学習活動の実態

図15は、この1年くらいの間での、生涯学習の頻度をみたものである。

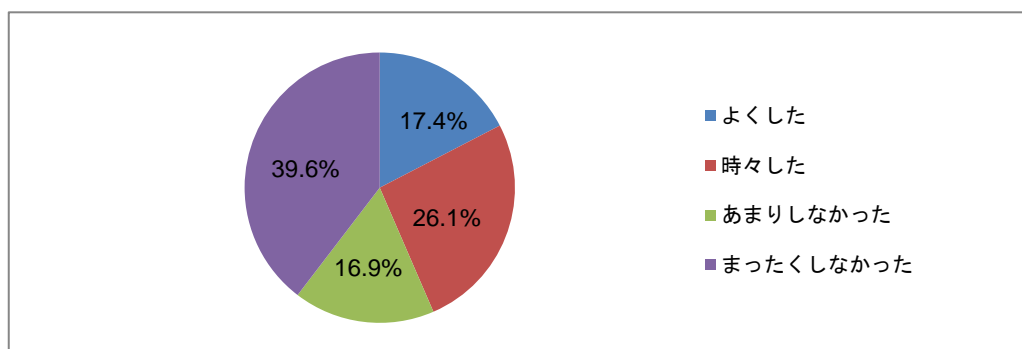


図15 生涯学習の頻度(N=1,262)

その結果、生涯学習を「よくした」と回答した人の率は17.4%、「時々した（26.1%）」と回答した人の率を合わせると、43.5%の人が学習を「した」と回答していた。

図 16 は、生涯学習の頻度と生きがい感との関係についてみたものである。

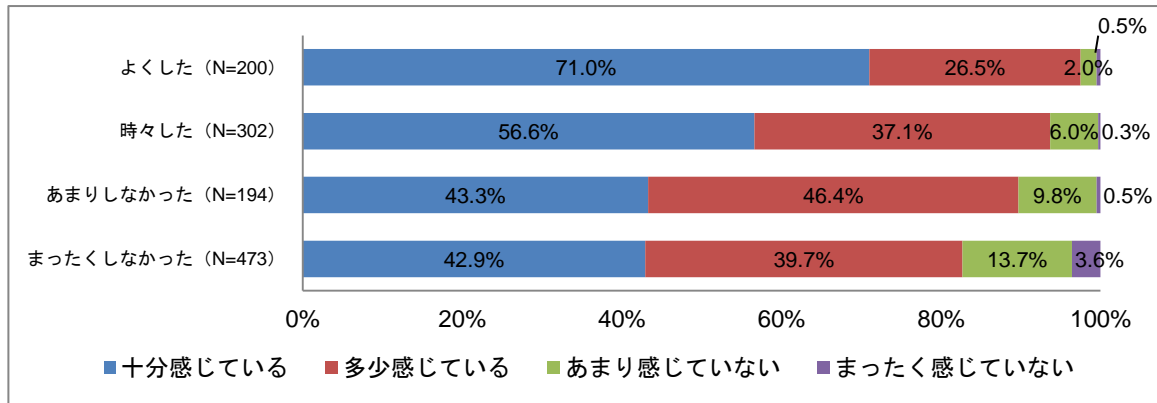


図 16 生涯学習活動と生きがい感

その結果、生涯学習の頻度が高い人ほど、生きがいを「十分感じている」と回答し、学習を「よくした」人では、71.0%の人が生きがいを「十分感じている」と回答していた。

2) 学習内容

図 17 は、行った学習の内容をみたものである。

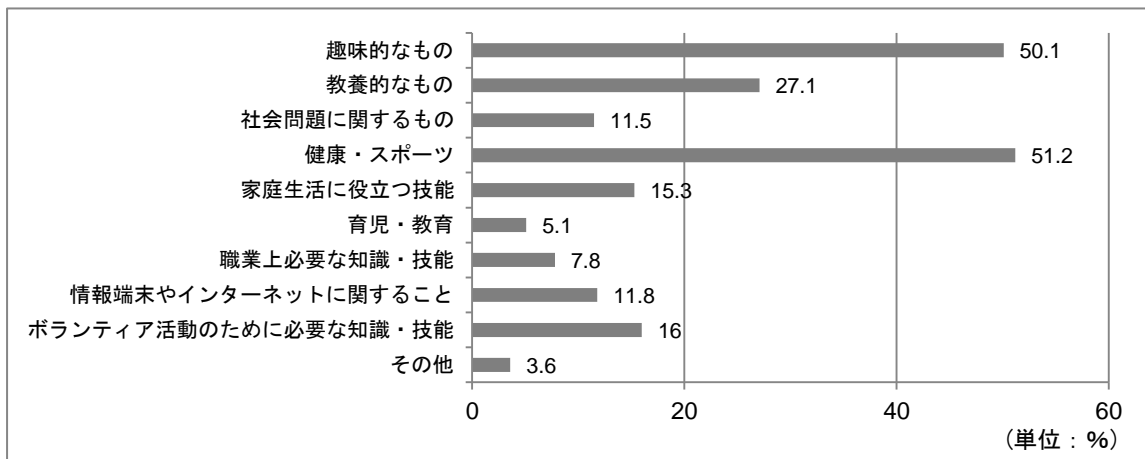


図 17 学習内容(複数回答)

その結果、「健康・スポーツ（健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳など）」と回答した人の率が 51.2% でもっとも高く、次いで「趣味的なもの（音楽、美術、華道、舞踏、書道、レクリエーション活動など）（50.1%）」、「教養的なもの（文学、歴史、科学、語学など）（27.1%）」の順となっていた。

図 18 は、学習内容を、生きがいを「十分感じている」と人と、「感じていない」と人のグループに分けてみたものである。

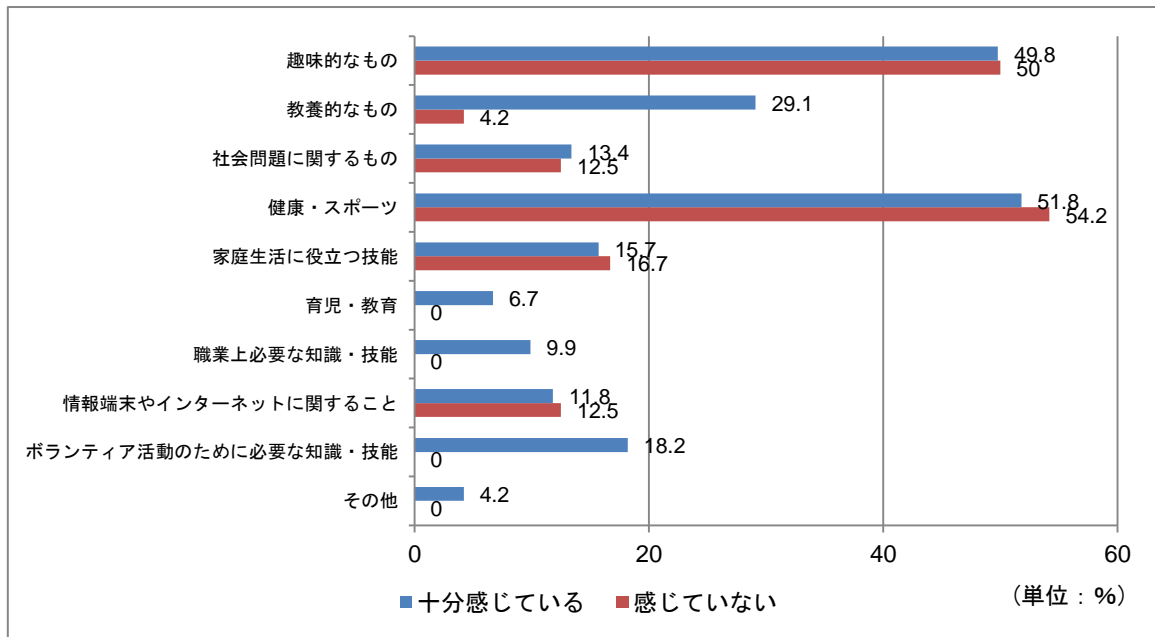


図 18 学習内容と生きがい感(複数回答)

その結果、両者とも、「健康・スポーツ（健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳など）」と回答した人の率ももっとも高く、次いで「趣味的なもの（音楽、美術、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など）」であることは共通していたが、次いで生きがいを「十分感じている」人では「教養的なもの（文学、歴史、科学、語学など）」、「感じていない」人では「家庭生活に役立つ技能（料理、洋裁、和裁、編み物など）」となっていた。

両者を比較すると、「教養的なもの（文学、歴史、科学、語学など）」と「ボランティア活動のために必要な知識・技能」で大きな開きがあり、生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。

3) 学習の場所や形態

図 19 は、学習の場所や形態をみたものである。

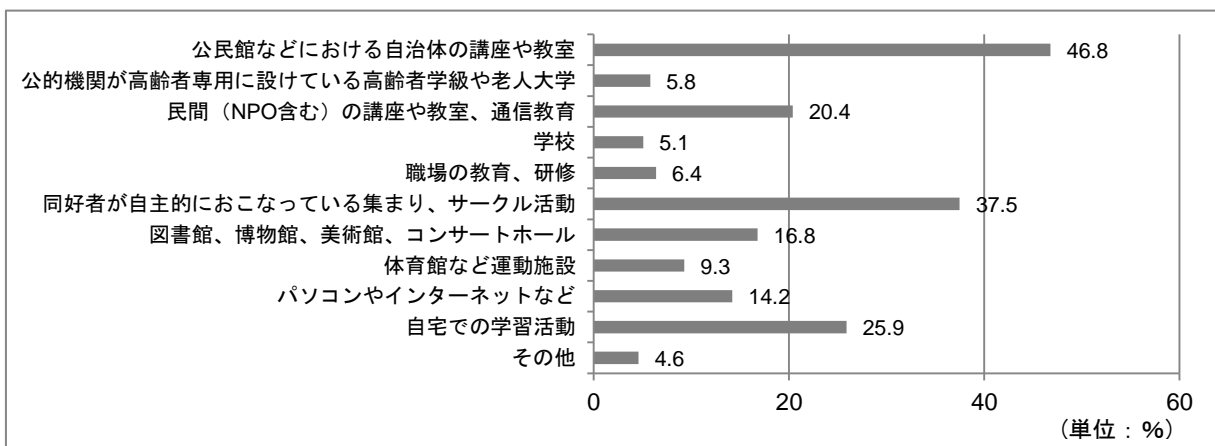


図 19 学習の場所や形態(複数回答)

その結果、「公民館などにおける自治体の講座や教室」と回答した人の率が46.8%でもっとも高く、次いで「同好者が自主的におこなっている集まり、サークル活動（37.5%）」、「自宅での学習活動（25.9%）」の順となっていた。

図20は、学習の場所や形態を、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみたものである。

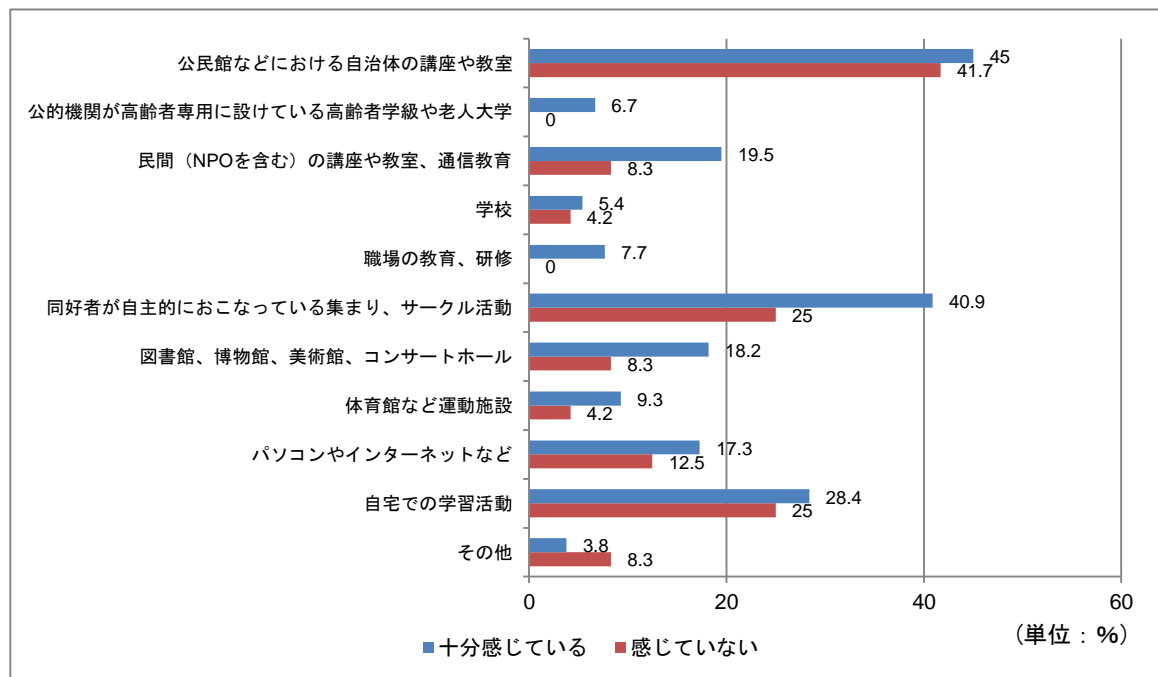


図20 学習の場所や形態と生きがい感(複数回答)

その結果、両者とも「公民館などにおける自治体の講座や教室」と回答した人の率がもっとも高いことは共通していたが、次いで、生きがいを「十分感じている」人では「同好者が自主的におこなっている集まり、サークル活動」、「自宅での学習活動（テレビ、ラジオ、書籍など）」の順、「感じていない」人では「同好者が自主的におこなっている集まり、サークル活動」と「自宅での学習活動（テレビ、ラジオ、書籍など）」が同率となっていた。

両者を比較すると、「同好者が自主的におこなっている集まり、サークル活動」で大きな開きがあり、生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。

4. 考察

今回の分析の結果からは、以下のことが明らかとなった。

(1) 社会参加活動の経験は、生きがい感を強める。

社会参加活動を「行っている」人では、57.2%が生きがいを「十分感じている」と回答していたのに対して、「行っていない」人では42.3%であり、社会参加活動の経験が生きがい感を強めていることが明らかとなった。身体的な衰えや社会的地位、人間関係の喪失等、多くの喪失を経験する高齢期において、自らの学びの成果や経験が地域で必要とされ、役立っているという実感は、高齢者の有用感を高め、生きがい感を強めることにつながっているといえよう。

(2) 生きがいを「十分感じている」人は、「感じていない」人よりも活動への参加頻度が高い

もっとも力を入れている活動に参加した頻度と生きがい感との関係を見ると、生きがいを「十分感じている」人の率は、「週に2、3回程度」以上の人で高く、「月に1回程度」以下の人で低いことが明らかになった。活動への参加頻度が高いほど、生きがい感は強いといえる。

(3) 生きがいを「十分感じている」人は、「感じていない」人よりも「地域社会に貢献したいから」という理由で活動に参加する人の率が高い。

もっとも力を入れている活動に参加した理由を、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみると、「生活に充実感を持ちたいから」、「健康や体力に自信をつけたいから」、「地域社会に貢献したいから」で20ポイント以上の開きがあり、すべて生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。特に、「地域社会に貢献したいから」では30ポイント近い開きがあった。

(4) 生きがいを「十分感じている」人は、「感じていない」人よりも「生活に充実感ができた」と感じている。

もっとも力を入れている活動に参加して良かったことを、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみると、「生活に充実感ができた」、「自分の技術、経験を生かすことができた」、「健康や体力に自信がついた」、「地域社会に貢献できた」で20ポイント以上の開きがあり、すべて生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。特に、「生活に充実感ができた」で50ポイント近い開きがあった。

(5) 「生産・就業」、「教育・文化啓発」、「生活環境改善」に関する活動を行っている人の生きがい感は強い。

もっとも力を入れている活動内容と生きがい感との関係を見ると、生きがいを「十分感じている」人の率が高いのは、「生産・就業（生きがいのための園芸・農業、シルバー人材センター等）」、「教育関連・文化啓発活動（学習会、子供会の育成、郷土芸能の伝承等）」、「生活環境改善（環境美化、緑化推進、まちづくり等）」であった。就労や学習、また自らの経験を伝えたり、地域づくりに関わることで、生きがい感を強めているといえよう。

(6) フルタイムで働いている人の生きがい感は強い

就労の形態と生きがい感との関係を見ると、生きがいを「十分感じている」人の率ももっとも高かったのは、「フルタイムで正規社員として」働いている人であり、次いで「フルタイムで「嘱託」等として」働いている人、「自分の働きたい時に働けるような形態」で働いている人の順となっていた。一方、「現在は、働いていない」人の率が、もっとも低くなっていた。フルタイムでの就労が、高齢者の生きがい感を強めている。

(7) 学習頻度が高いほど、生きがい感が強い

学習の頻度と生きがい感との関係についてみると、学習の頻度が高い人ほど、生きがいを「十分感じている」と回答し、学習を「よくした」人では、71.0%の人が生きがいを「十分感じている」と回答していた。一方、学習を「まったくしなかった」人では、42.9%であった。学習活動は、高齢者の生きがいの重要な源泉となっているといえる。また学びは、社会参加活動の経験とも密接に関わっている（図21）。このことから、学習と社会参加と生きがい感との間には、学習活動が社会参加のきっかけを与え、地域での活動が高齢者の生きがい感を強める、といった関係性も推察される。

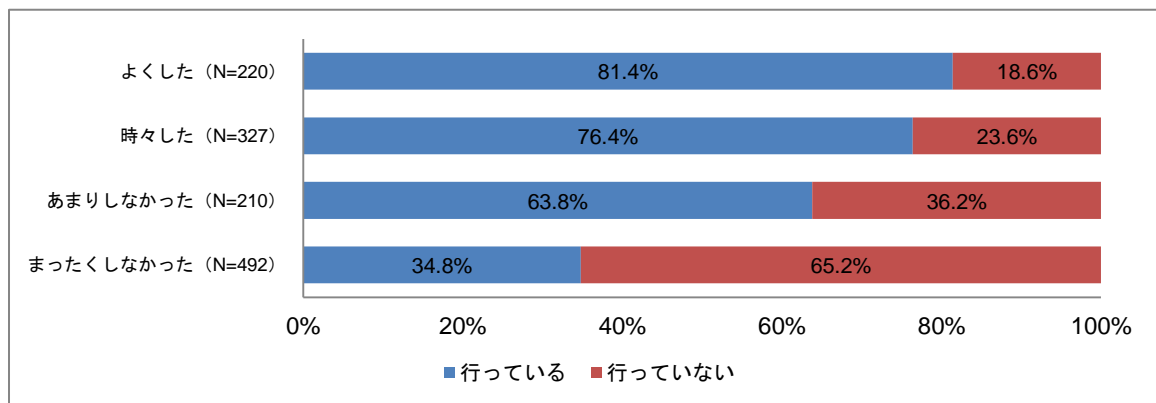


図21 学習の頻度と社会参加活動の経験

(8) 生きがいを「十分感じている」人は、「感じていない」人よりも「教養的なもの」と「ボランティア活動のために必要な知識・技能」を学んでいる人の率が高い。

学習内容を、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみると、「教養的なもの（文学、歴史、科学、語学など）」と「ボランティア活動のために必要な知識・技能」で、20ポイント前後の開きがあり、生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。

(9) 生きがいを「十分感じている」人は、「感じていない」人よりも「同好者が自主的におこなっている集まり、サークル活動」を行っている人の率が高い。

学習の場所や形態を、生きがいを「十分感じている」人と「感じていない」人のグループに分けてみると、「同好者が自主的におこなっている集まり、サークル活動」で15ポイント以上の開きがあり、生きがいを「十分感じている」人の率が高くなっていた。高齢期というのは、定年を機に職場の人間関係を失う等、これまでの人とのつながりが薄くなる傾向がある。同好会やサークル活動を通じた学習は、その過程で新たな人間関係を創出することになり、そのことが彼らの生きがい感を高めることにつながっているといえよう。

5. おわりに

私たちの多くには60歳で定年を迎えた後、さらに30年以上の人生が残されている。長期化する高齢期を充実させていく上で、生きがいを持つことが重要であることは誰もが認めるところであろう。本稿では、この生きがい感の強化に、社会参加や学習が密接に関わっていることを明らかにした。

アメリカの老年医学者ロバート・バトラーは、「エイジズム（高齢者差別）」に対する反論として、「プロダクティブ・エイジング」という概念を提唱した。これは、高齢者を「社会の依存者」ではなく、「生産的な存在」とみなそうということである。ここでいう「生産性」とは、本質的な意味で社会を豊かにすることであり、その中には物財を作り出すことだけでなく、ボランティア活動、地域活動、相互扶助活動等も含まれる。高齢者自身の持つ知識や経験を地域や社会に生かすことを通してプロダクティブに生きることは、彼らの生きがいにつながり、高齢期を豊かなものにしていく。そして、こうした高齢者の生き方が当たり前になっていくことで、社会もまた活性化していくに違いない。

【参考文献】

ロバート・バトラー、ハーバード・グリーソン編、岡本祐三訳『プロダクティブ・エイジングー高齢者は未来を切り開くー』日本評論社、1998年。